

第4節 被籠状突帯壺について — 茨木市溝咋遺跡出土の資料に接して —

(財)元興寺文化財研究所 角南聡一郎

第1項 はじめに

1999年3月2日、(財)大阪府文化財調査研究センター北部調査事務所にて、茨木市溝咋遺跡出土資料を実見させていただく機会があった。この遺跡は、古墳時代初頭の集落で、その特徴として外来系土器が多くみられる点が第一にあげられる。当日は、外来系土器を中心に資料を実見・熟覧させていただいたが、中でも胴部に突帯を付した壺(1370)は、以前から関心があった遺物であるが、実見するのは神奈川県山王山遺跡資料に次いで二度目であった。当資料の存在は既に山田隆一によって紹介されている(山田 1998)。2A-2区溝120からの出土で、共伴した遺物の年代観から、当資料は弥生時代終末～古墳時代前期と考えられる⁽¹⁾。

そこで本稿では、この「特殊な壺」について、筆者がここ数年収集してきた資料をあげ、溝咋遺跡出土資料の位置付けを試みたい。またこの「特殊な壺」をめぐる筆者の仮説を提示し、今後の祭祀土器研究のための礎としてみたい。

第2項 被籠状突帯壺とは

1968年、神沢勇一によって、神奈川県横浜市城郷中学校遺跡から出土した、胴部に縦・横方向に突帯を貼付した弥生時代後期の壺が紹介された(神沢 1968)。ここで神沢は、この突帯は土器に付した籠状の編物を模したようであるとしている。これが恐らく、この種の土器がはじめて考古学界に紹介されたものである。続いて村田文夫は、神奈川県川崎市久地伊屋之免古墳出土のこの種の壺について紹介し、その名称を「縦位・横位の突帯文を有する土器」とし、はじめて8例の類例を集成した(村田 1987)。この集成によれば、分布は駿河から東南北部まであり、例の多いのは関東地方である。消長は弥生時代後期に出現し、古墳時代中期前半までは存在しているようである。その故地については、神沢勇一からの教示として東海地方の弥生時代後期伊場式に求め、主に黒潮海路によって伝播したのではないかとする。村田はその後、これらの土器を「縦位隆帯文」土器と呼び、河内の弥生中期後半の水差し、無頸壺に「縦位に隆帯」が付された資料も含めて考えた(村田 2000)。飯島克巳は、群馬県榛名町稲荷森遺跡住居跡出土のこの種の壺を紹介した。基本的器形は南関東から東海南部のものであるとし、外来系土器と位置付けている(飯島 1991)。この資料は底部は穿孔され、外面には赤彩が施されており、非日常的な色彩が濃い。続いて山田隆一は、溝咋遺跡出土資料を紹介した際、この種の土器を集成し12例を提示した。分布については、一部東北、駿河に分布を広げながら、広く関東地方に散在するのが現状であろうとしている(山田 1998)。

研究史を振り返ってみると、どうやらこの種の土器は、器形としては壺に限定されるが、統一名称を持たないようである。そこで、統一名称をここで与えてみよう。

胴部に貼付される突帯は、おそらく籠状の紐が壺に被せられている様子を模したものであると考えられる。弥生～古墳時代の土器の中には、籠状のもので包まれていた痕跡の認められるものがある。これらの土器は「被籠土器」、「籠目土器」などと呼ばれる。この種の土器を全国的に集成・検討した後藤信祐は、「籠目土器」とは本来、「籠目が残っている土器」のみを指しており、籠で被われている土器、籠で

被われていた痕跡の認められる土器の両者を「被籠土器」と呼んでいる（後藤 1989）。この用語の定義を支持するならば、今回問題としている土器の突帯は、被籠の状態を模倣したものであることから、「被籠状突帯」となる。この種の突帯を有するのは壺のみであることが研究史からも窺えることから、この種の土器をここでは「被籠状突帯壺」と呼んでみよう。

第3項 分布と消長

前述の山田隆一により、近年の資料はほぼ集成されたと言っても過言ではなかろう。ここでは、山田文献でもれていた資料を増補して一覧表を作成した（表36、図296～298）。この結果、管見にふれた被籠状突帯壺は17遺跡で計22例となった。

分布を見てみると、東は福島県～西は当遺跡まで広がっている。石川県金沢市新保本町西遺跡例の存在により、その分布は北陸にも広がっていることが確認できた。全体には南東北・関東・中部・東海といった東日本に事例が集中しており、溝咋遺跡例は西日本では初見となる。また、弥生時代後期段階の分布は静岡県・神奈川県域に多く、古墳時代になると北関東や南東北で事例が出現する。また、その出現は弥生時代後期後半で、古墳時代中期前半まで存在するようだ。

出土遺構をみると、弥生時代後期段階では墳墓からの出土は無いが、古墳時代に入ると墳墓からの出土が中心であることが看取できる。

形態は、二重口縁の壺である場合がほとんどであるが、静岡県伊場遺跡例のものは単純口縁を呈する。サイズは大きなものから小さいものまでである。群馬県貝沢柳町遺跡例や、山梨県榎田遺跡例のものは、いずれも底部に焼成前穿孔がある。

第4項 被籠状突帯壺の変遷と意味

次にこの被籠状突帯壺の変遷と意味について、現状では資料数の制約があるが考えてみよう。

先にみたように、被籠状突帯壺は弥生時代後期には集落内、特に住居跡でのみみられるが、古墳時代になると墳墓からの出土が目立つ。墳墓出土資料には底部焼成前穿孔と赤彩が施されることが多い。弥生時代には墳墓に供献される土器が焼成後穿孔されることが多いが、古墳時代になるとこれが形骸化し底部が焼成前に穿孔されるようになることは既に知られている。

表36 被籠状突帯壺出土資料一覧

No.	遺跡名	所在地	出土遺構	時期	備考	文献
1	龍門寺	福島県いわき市	第5号住居跡	古・中・前		廣岡ほか 1985
2	龍門寺	福島県いわき市	遺構外	古・中・前		廣岡ほか 1985
3	龍門寺	福島県いわき市	遺構外	古・中・前		廣岡ほか 1985
4	龍門寺	福島県いわき市	遺構外	古・中・前		廣岡ほか 1985
5	男壇	福島県会津坂下町	第1号周溝墓	古・前	外面赤彩	古川ほか 1990
6	安戸星1号墳	茨城県水戸市	くびれ部東側	古・前		茂木・塩谷編 1982
7	番後台	千葉県市原市	021号住居跡	弥・後・後		藤崎 1982
8	貝沢柳町	群馬県高崎市	1号方形周溝墓	古・前	パレススタイル壺・底部穿孔	久保ほか 1986
9	荒砥二之堰	群馬県前橋市	方形周溝墓	古・前		徳江編 1985
10	稲荷森	群馬県榛名町	5A住居址	弥・後・後	外面赤彩	飯島 1991
11	榎田	山梨県甲府市	第3号方形周溝墓	古・前	外面赤彩・底部穿孔	高野 1997
12	榎田	山梨県甲府市	第4号方形周溝墓	古・前	外面赤彩・底部穿孔	高野 1997
13	榎田	山梨県甲府市	第4号方形周溝墓	古・前	外面赤彩・底部穿孔	高野 1997
14	山王山	神奈川県横浜市	第21号住居址	弥・後・後		小川・河野・穴戸 1985
15	城郷中学校敷地	神奈川県横浜市		弥・後		神沢 1968, 1969
16	久地伊屋之免古墳	神奈川県川崎市	第1主体部西側	古・前		村田 1987
17	伊場	静岡県浜松市		弥・後・前		向坂・辰巳 1982
18	梶子	静岡県浜松市	SE02	弥・後・前	突帯剥離	鈴木 1991
19	雌鹿塚	静岡県沼津市	湧水遺構-1	弥・後・後		石川 1990
20	朝日	愛知県清洲町	包含層	弥・中・中～中・後		加藤編 1982
21	新保本町西	石川県金沢市	SK07	弥・末～古・初	胴部焼成後穿孔	楠 1992
22	溝咋	大阪府茨木市	溝120	弥・末～古・初		本報告

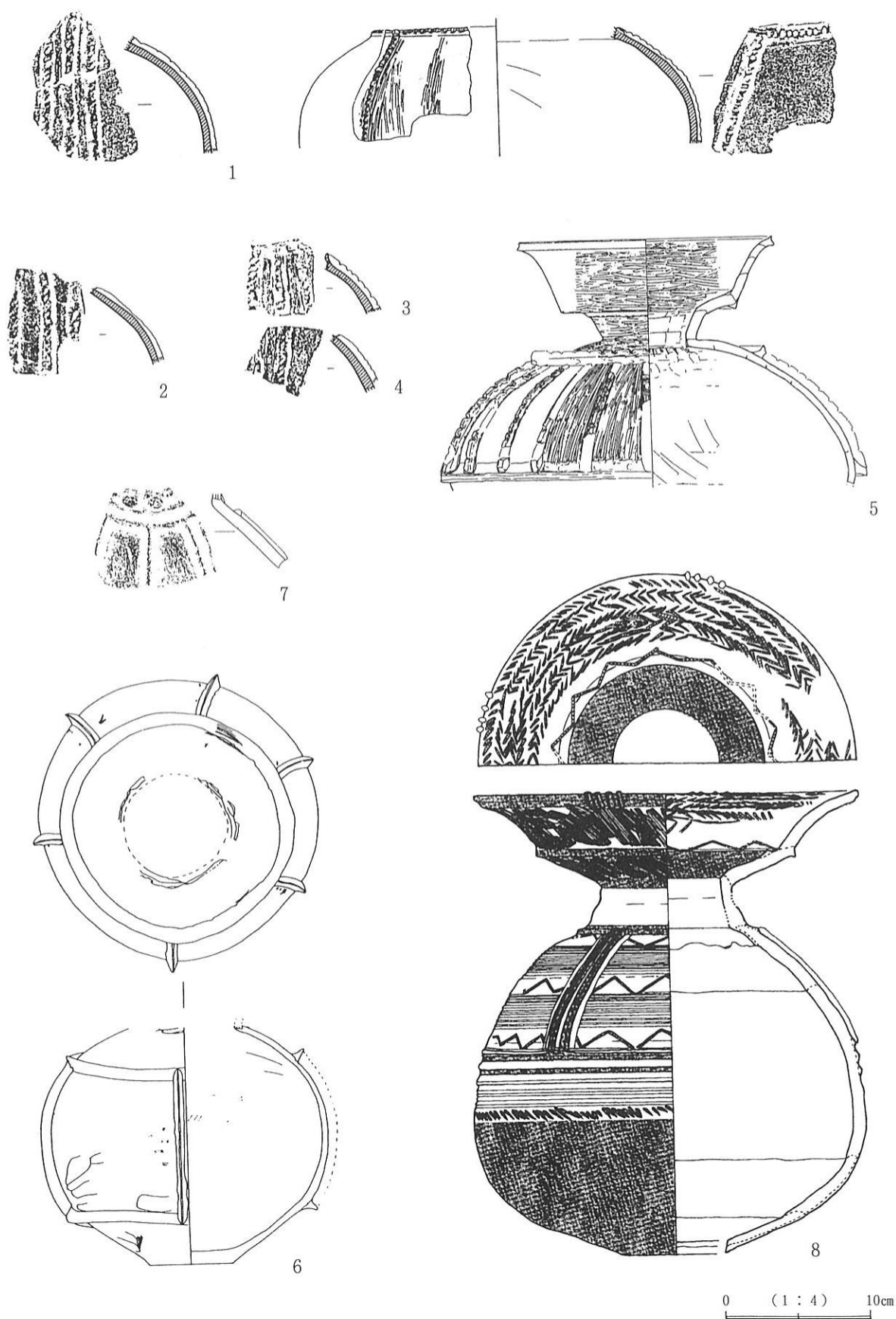


図308 被籠状突帯壺集成(1) (各文献より、No.は表36に同じ)

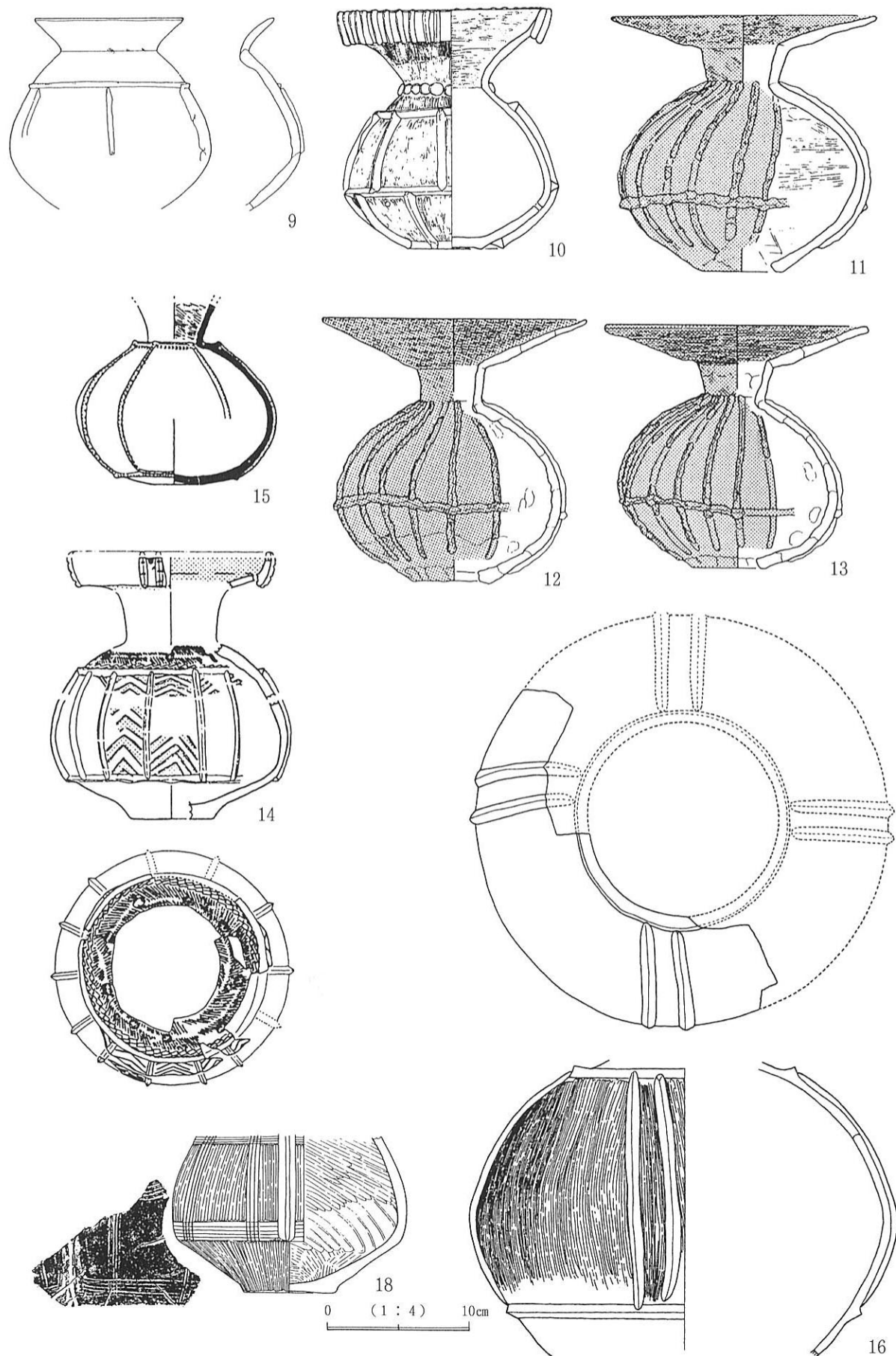


図309 被籠状突帯壺集成(2) (各文献より、No.は表36に同じ)

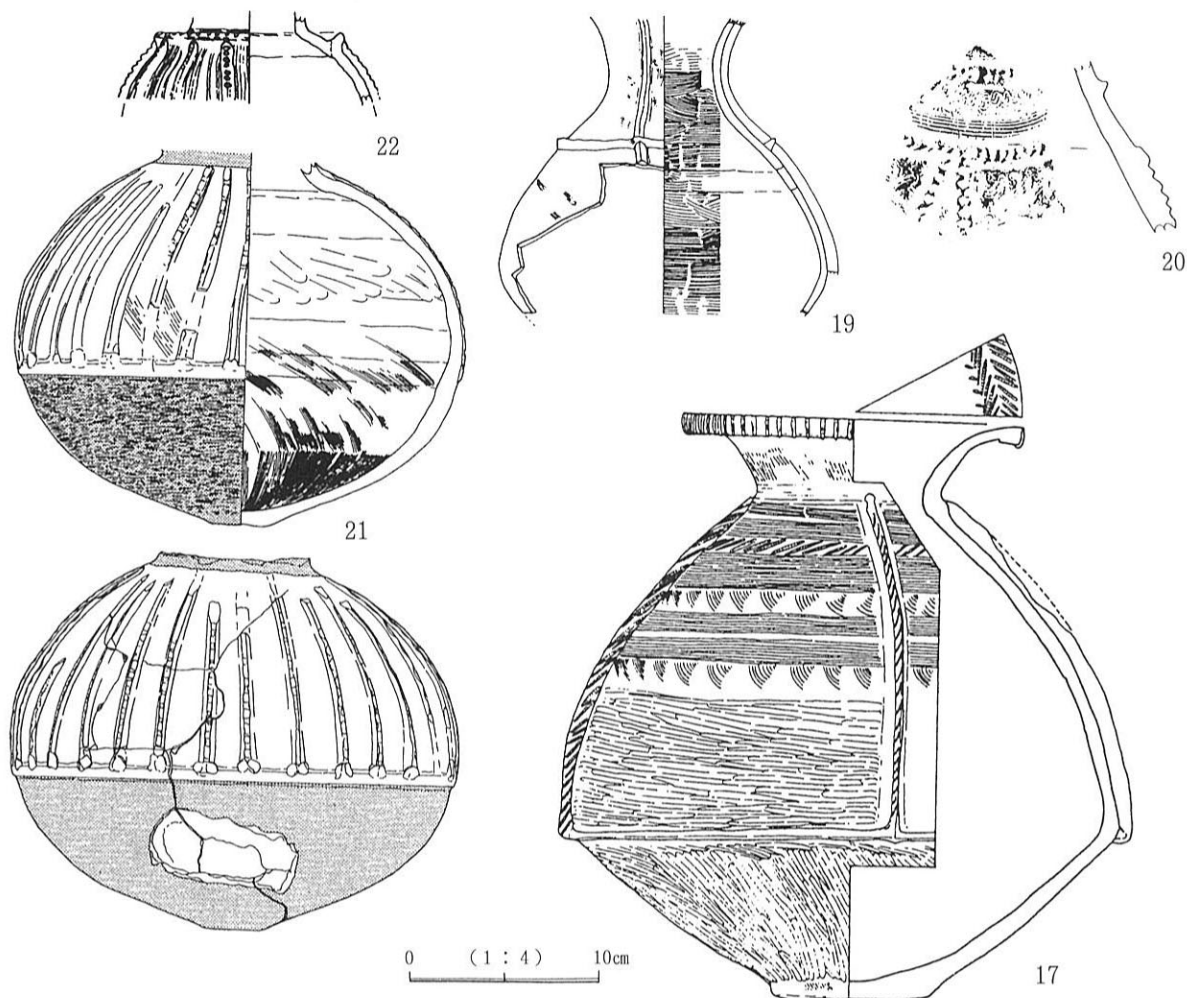
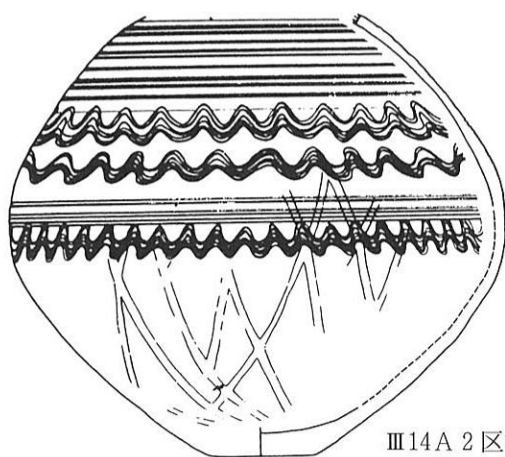
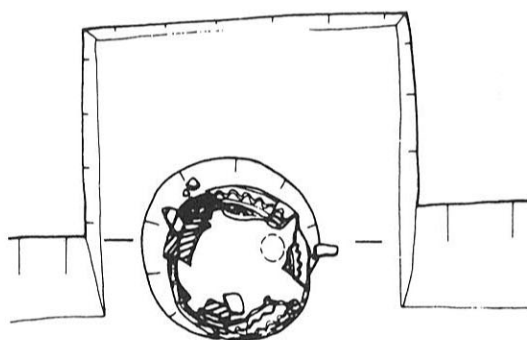
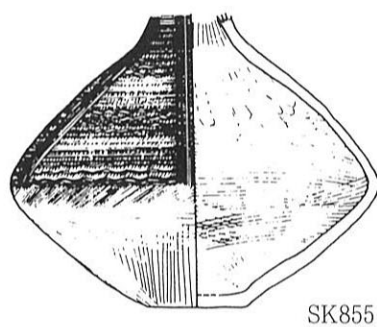
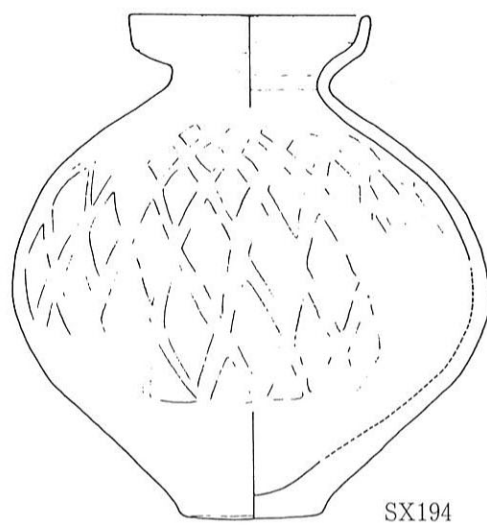
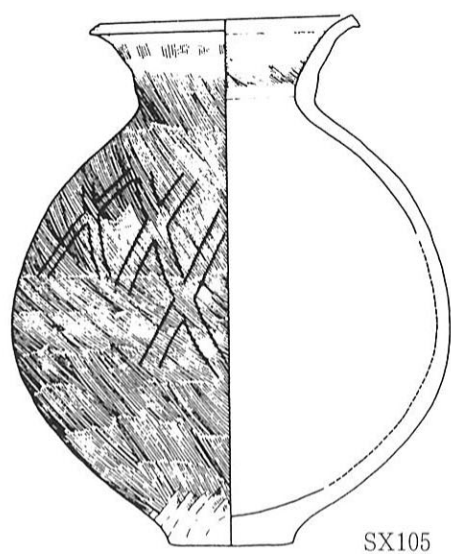
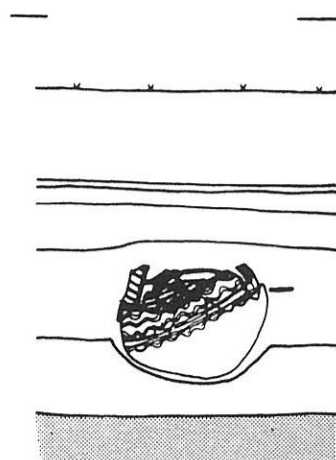


図310 被籠状突帯壺集成(3) (各文献より、No.は表36に同じ)

ここで示唆に富む事例として、石川県金沢市新保町西遺跡例がある。被籠状突帯壺は土坑 SK07から出土した。以下報告書から抜粋しながら概略をみていこう(楠 1992)。遺構の規模は 1.33×1.29 mで、深さ90.92 mである。形状は略円形を呈し、底面には若干凹凸がある。底部直上南寄りに長径5～7 cmの小石が20個以上置かれていたかのような状態で出土した。出土遺物には土器と桃の種がある。土器は上位に高杯・器台があり、下位に被籠状突帯壺があった。壺は口頸部を打ち欠き、胴部下半が意図的に穿孔された状態で出土した。桃の種は計33.5個出土した。報告者はこの土坑の機能として、出土土器の器種組成が、壺・小型土器・高杯・器台等が多く、甕が少ないことから1. 素堀の井戸、2. 祭祀行為後のかたづけをおこなった祭場、3. 貯蔵穴の三つの可能性を提示している。また出土土器の時期として、漆町編年の6群を考えている(田嶋 1986)。これは畿内では庄内II式期前後に相当し、弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられる。ここで一旦、本題とは離れて被籠状突帯壺の原型と考えられる被籠土器の機能、意味についてみておこう。前述の後藤信祐は被籠土器の出土遺構として大きく以下の6つに分けられるとする(後藤 1989)。1. 竪穴住居跡、2. 土器棺、3. 方形(円形)周溝墓、4. 土坑、5. 溝、6. 自然河道。2～6の最終出土状況からは被籠土器本来の意味を推定することは難しいとしながらも、儀礼により供献されたり廃棄されたものが多いことを示している(後藤 1989)。また、1については、籠で被って多の壺と区別するという特殊性から、種籾保存用の壺や稲粳運搬用の壺である可能性が高いとした。



0 (1 : 4) 10cm



0 (1 : 20) 50cm

図311 朝日遺跡の被籠というデザイン（加藤編 1982より）

ところで、前述したように被籠状突帯壺は古墳時代になると墓からの出土が多くなる。被籠土器の場合、墓と関係した事例はどうだろう。後藤の集成した例では、土器棺や周溝墓からの出土例はどうやら東日本で多く見られるようだ。一例をあげると愛知県清洲町朝日遺跡では(図299)、被籠状突帯壺も出土しているが、方形周溝墓の周溝墓 SX105及び SX194から山中式期の被籠土器も出土しており、これらは周溝墓への供献土器であった可能性が高い(加藤編 1982)。また、Ⅲ14 A 2 区壺棺は高蔵式期の広口壺を使用しており、単独で立地している。この土器棺の棺身には被籠の痕跡が認められる(加藤編 1982)。以上のことから、弥生時代中期末から後期前半にかけて、被籠土器が墓への供献土器や「子供」用の棺として意識的に使用される場合があったことが窺える。また、弥生時代後期前後の東海地方には、被籠土器をモデルとしてデザインされたかのような壺が存在している。SK855出土の資料がそうである(図299)。つまり、朝日遺跡では弥生時代中期中葉～後葉にかけて、壺を実際に籠状に被ったものを特殊な用途として使用したり、この影響からか被籠というデザインで壺を飾ったりしている様子が窺える。

一方、群馬県貝沢柳町遺跡1号方形周溝墓から出土した被籠状突帯壺は、東海系パレススタイル壺の範疇で捉えられるものである。そこで想起されるのが前述の朝日遺跡である。筆者は以下のように考えてみた。朝日遺跡付近で被籠土器から被籠状突帯壺への転化が生じ、それが東海系土器の動きと連動して群馬県へと波及した、とすると納得がいく現象である。

更に古墳時代にも興味深い「被籠」のデザインと考えられる事例が存在する。岐阜県垂井町に所在する親ヶ谷古墳は、全長85mの古墳時代前期の前方後円墳である。この古墳からの出土品のうち石製壺がある。この壺は二重口縁を呈し、胴部外面は29ヶ所の匙面によって構成されている(東海古墳文化研究会 1988、図300)。この匙面をわざわざ施すというデザインは一体何に由来したものなのだろう。一つの可能性を提示してみると、これは本来、壺が被籠された状態を模倣したものではないかと思われる。つまり被籠土器が石製へと材質転化されたもの、とは考えられないであろうか。

また、籠の編み方について注目してみたい。被籠状突帯壺の突帯は、全て縦方向と横方向に貼りつけられており、被籠土器にみられるような斜め方向のものは存在していない。後藤信祐による被籠土器の籠の編み方の分類によると、縦横方向によるⅠ類、「頸部と胴部下半に2本の蔓をより合わせて水平に

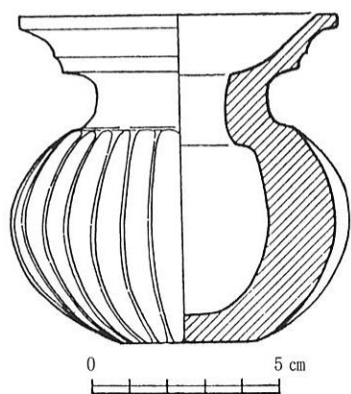


図312 親ヶ谷古墳出土石製壺
(東海古墳文化研究会 1988より)

めぐらし、別の一本の蔓で、これらを交互に引懸けて折り返しながら土器にそって縦方向にとりつけていき、そのあと上下両帯の間を2本の蔓でさきの縦帯をより込みながら水平にとおした横帯を入れたもの」とされるものである(後藤 1989)。被籠状突帯壺にⅠ類に相当するものしか存在しないのは、たまたまそうだったとは考えにくく、Ⅰ類の被籠をする壺の使われ方と深く関係していると思われる。つまり、Ⅰ類の壺は特別な用途として使われており、これを模倣することで被籠状突帯壺には祭祀用の土器としての意味が更に付加されたのではなかろうか。

以上のことを要約すると、弥生時代後期前半段階までは、被籠土器を集落内での祭祀に用いる場合と墳墓の祭祀に用いる場合の両者が存在した。このような状態は古墳時代前期までは、ある程度継続して認められる。次に弥生時代後期後半段階には、被籠土器を模倣した被籠状突帯壺が出現する。この段階ではこの種の土器が、祭祀的に使用されたかどうかは明らかになっていない。更に被籠状突帯壺は弥生時代終末～古墳時代初頭には、

主に集落内で祭祀的に使用されていたようだ。古墳時代前期にはこれに墳墓での祭祀的使用が顕著になる。

被籠状突帯壺と類似した祭祀的性格が想定されるものとして、三連S字甕がある。三連S字甕は小型のS字甕三個が焼成前の段階から連結して製作されたもので、これまでに神奈川県平塚市御所ヶ谷遺跡の円形周溝墓、静岡県富士宮市中向原遺跡、長野県松本市石行遺跡2号住居跡、滋賀県能登川町斗西遺跡SD02-5等、5例が知られる(図301)。

これと関係して、岐阜県大垣市曾根八千町遺跡の古墳時代前期の木棺墓SX02には、下半部焼成後穿孔された3個体のS字甕があたかも三連S字甕を連想させるような状態で供献されていた(鈴木 1997、図302)。このことはつまり、煮炊具としての甕が、墳墓祭祀や集落内祭祀に用いられ、甕を三個体並べて置くことに何らかの意味があった。古墳時代になって、この行為が小型化した甕でおこなわれるように、そのイレギュラーな形状として三連S字甕が製作され使用される場合もあったのではなかろうか。いずれにしても、本来の甕としての機能からはかけ離れたものとして使用されている。

ここで被籠状突帯壺を祭祀と関係した遺物であると仮定し、弥生時代から古墳時代への過渡期で生成された特殊なものであると捉えるならば以下のプロセスが想定できる。生成のモデルを提示してみよう。弥生時代の稲作主体の農耕社会とともに誕生した被籠土器は、種籾保存用の壺及び稲籾運搬用の壺である場合が多かった。当初はどうであったか不明だが、やがて被籠という行為にはその内容物が、他の壺

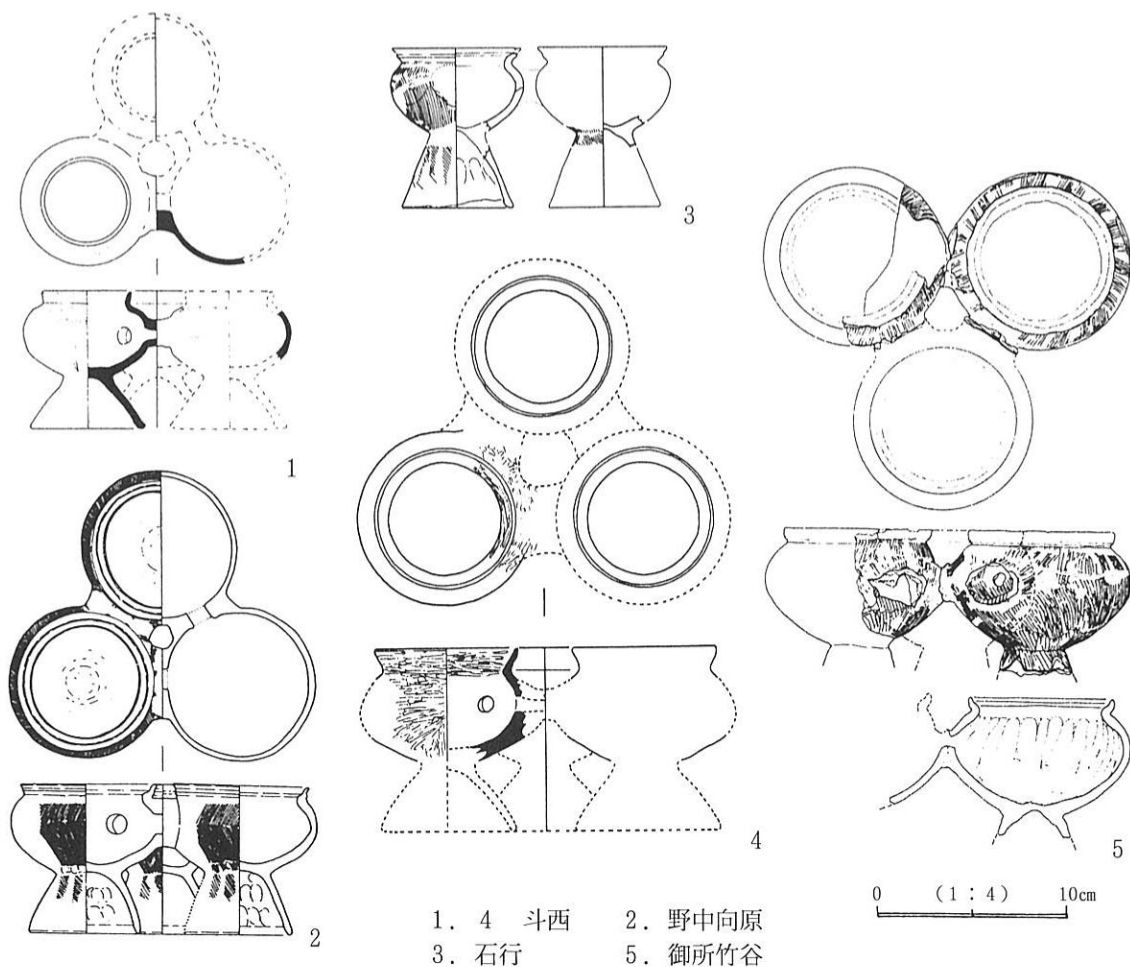


図313 三連S字甕集成(各文献より)

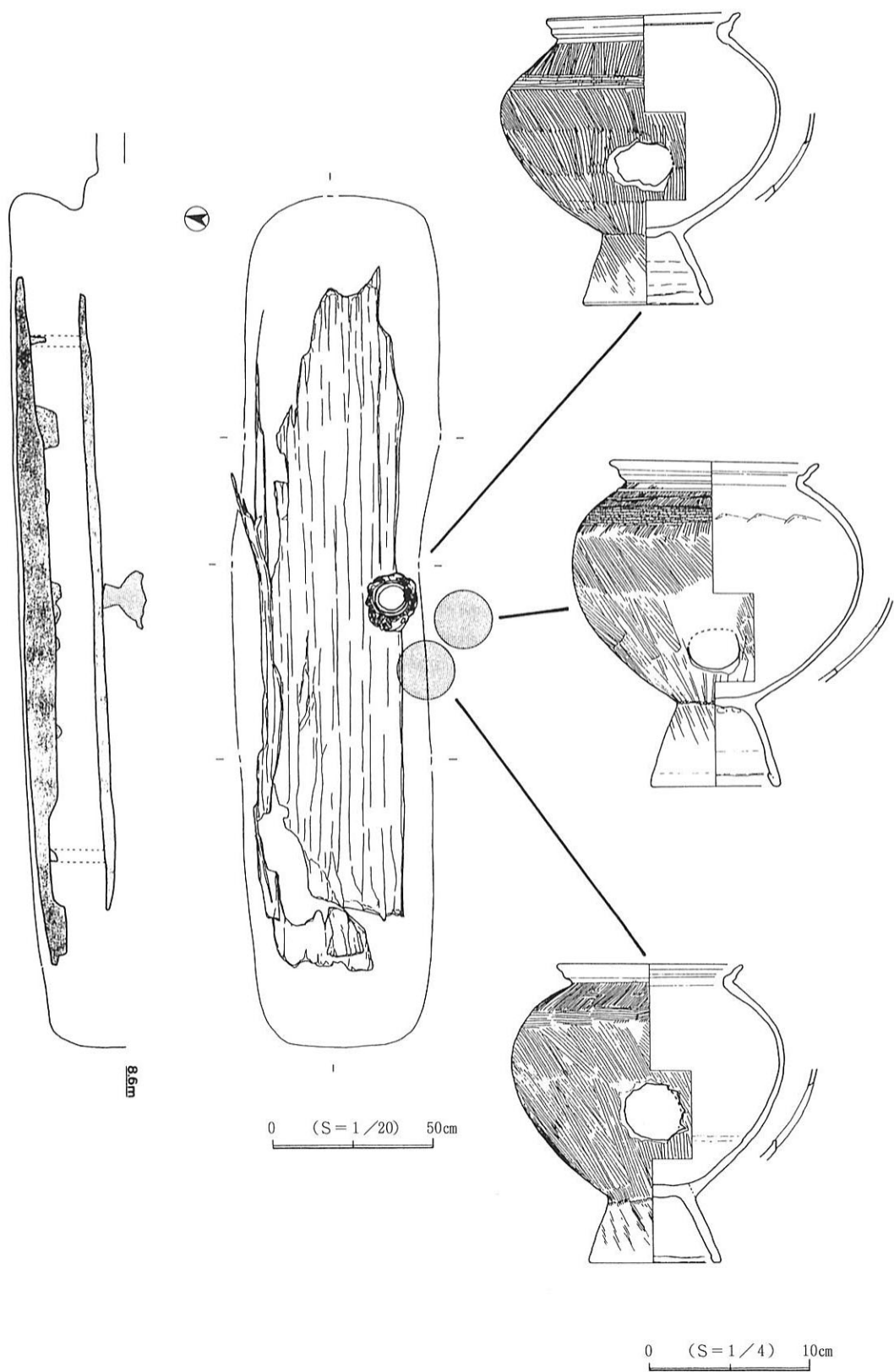


図314 曾根八千町遺跡 SX02と供献S字甕（鈴木 1997より作成）

と区別されるものであるという意味が付加されるようになる。そして弥生時代中期になると、被籠という他との差異を強調するために、あらかじめ被籠を模した突帯を付した土器が誕生する。そして後期の段階になるとやや分布に広がりを見せるようになる。しかし被籠状突帯壺は主流にはならず、あくまで脇役にすぎない。恐らく依然として主体は本来の被籠土器であろう。こうした被籠状突帯壺はそもそもその誕生の段階から実用品ではなく、農耕祭祀と関係したものであったと考えられる。

東日本では弥生時代後期前半段階までは、集落での祭祀と墳墓での祭祀に使用される土器の区別は不明確である。ところが、弥生時代後期後半段階～古墳時代初頭にかけて、祭祀形態に段階的に変化が生じていくようだ。この変化の背景としてはもちろん内的な要因もあろうが、弥生時代中期後半～後期にかけての鉄器の流入により、様々な生産用具が石器から鉄器へと転化していったことなどの大陸・半島からの外的要因による変化が生じ、弥生時代後期後半段階には列島内の内的なアイデンティティの混沌と転化が発生した結果、弥生社会への鉄器の急速な普及などが考えられる。この所産として、一方では吉備の特殊器台や特殊壺のような、墳墓祭祀専用の土器が誕生するが、他方では、被籠状突帯壺や三連S字甕のような突然変異的土器を誕生させている。古墳時代前期には集落内で使用された祭祀と関係した文物と、墳墓の祭祀で使用された文物の区別が一段と明確になりつつある状態が看取される。この後、古墳時代前期末には、再び大陸・半島からの窯技術や竈の導入などの、外的な要因によって大きく社会は変化していく。この結果、葬りと祭りの明確な線引きがおこなわれるようになるのではなかろうか。

被籠状突帯壺、三連S字甕、それから筆者が籠目・籠形土器⁽²⁾と称している、土器の器面に籠（笊のような形状のもの）の圧痕を付着させ、籠そのものの形を模倣したと考えられる土器など（角南 1999）、いずれも本来それらの「器」に備わっていた「貯蔵する」「煮炊する」といった機能とは異なった祭祀としての用いられ方をしている。恐らくこれらは弥生時代～古墳時代に移行する過程で、祭祀行為の情報にも混乱が生じた結果誕生した、イレギュラーな「器」であることには疑う余地はないだろう。しかし、この情報の乱れ・混乱は、一体何に起因するものであるのか、これらの祭祀が時間の流れとともに、どのようなものからどのようなものへと変化していったかを考える上では重要な遺物であるのかもしれない。また、いずれも遺物として残存しにくい、植物繊維を用いた道具の使用方法を窺い知るためには格好の資料である。稀に遺跡から籠や編物そのものが出土することがあるが、今後、被籠土器などの特殊土器について考えるためには、籠や編物自体との比較検討もおこなわれるべきであろう。

第5項 おわりに

以上、溝咋遺跡出土資料を契機として、全国的にも稀な被籠状の突帯を有する壺について、ここでは「被籠状突帯壺」という名称を与え、集成を試みた。この結果より、被籠状突帯壺は被籠土器をモチーフとして生成された可能性が高い点や、その故地は朝日遺跡を中心としたエリアである可能性が強まった点などを明示した。また、被籠状突帯壺は東日本での弥生社会から古墳社会への移行過程で生じた「歪み」を象徴した資料ではないかと考えた。

被籠状突帯壺は、現状ではまだまだ資料数が少ないものであり、現段階ではその実態は不明な点も多く、曖昧模糊としている。しかし、今回、溝咋遺跡から出土をみたことによって、これまで東海、関東や東北地方においてのみ議論の対象であった考古資料が、一気に畿内とも無関係ではないということになってきた。今後、東日本を中心とした各地で類例が増加していくであろうが、西日本とも無関係で

はないことを念頭に置きつつ、単に「珍品」として取り扱う以上の検討がなされることを期待したい。
(文章中敬称略)

謝 辞

本稿作成に際して以下の方々の御教示・御協力を得た。記して感謝致します。神野 信、木澤直子、合田幸美、白石真理、西川修一、藤澤典彦、山田隆一（順不同・敬称略）

註

- (1) 調査担当者の合田幸美氏の御教示による。
- (2) 籠目・籠形土器は、西日本で弥生時代後期後半に出現する。筆者の見解では、当初から籠を型として使用し土器製作をおこなった結果「籠目」が付着したものと、籠の形を模倣し祭祀的な使用がされた「籠形」土器の二者が併存した可能性が高い（角南 1999）。

引用・参考文献

- 飯島克巳 1991 「榛名町稲荷森遺跡出土の弥生後期外来系土器」『群馬考古学手帳』2 群馬土器観会
石川治夫 1990 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書』II 沼津市教育委員会
植田文雄 1988 『斗西遺跡』能登川町教育委員会
植田文雄 1994 『斗西遺跡（2次調査）』能登川町教育委員会
植松なおみ 1980 「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』35 物質文化研究会
宇賀神誠司ほか 1987 『赤木山遺跡群II』松本市教育委員会
小川裕久・河野善映・宍戸信吾 1985 『山王山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター
加藤安信編 1982 『朝日遺跡』愛知県教育委員会
河野一也ほか 1988 『御所ヶ谷遺跡』日本窯業研究所
神沢勇一 1968 「東海地方系の弥生土器」『神奈川県立博物館だより』3 神奈川県立博物館
神沢勇一 1969 『神奈川県考古資料集1 弥生土器』神奈川県立博物館
楠 正勝 1992 『金沢市新保本町西遺跡III』金沢市教育委員会
久保泰博ほか 1986 『貝沢柳町遺跡』高崎市
後藤信祐 1989 「被籠土器考」『栃木県考古学会誌』11 栃木県考古学会
鈴木 元 1997 「曾根八千町遺跡出土のS字甕」『曾根八千町遺跡』大垣市教育委員会
鈴木敏則 1991 『梶子遺跡』VIII ㈱浜松市文化協会
角南聡一郎 1999 「弥生～古墳時代前期の籠目・籠形土器」『香川考古』7 香川考古刊行会
高野玄明 1995 『榎田遺跡』山梨県教育委員会・山梨県住宅供給公社
田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的位置付け」『漆町遺跡』I 石川県立埋蔵文化財センター
東海古墳文化研究会 1988 「岐阜県西濃地方の前方後方（円）墳の測量調査」『古代』86 早稲田大学考古学会
徳江秀夫編 1985 『荒砥二之堰遺跡』㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団
西川修一 1992 「特殊壺になれなかった壺」『古代』94 早稲田大学考古学会
西川卓志 1990 「弥生時代壺形土器小考」『播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念会
増田精一 1982 「弥生時代の稲粳の保存」『歴史公論』82 雄山閣
村田文夫 1987 「歴史素描・久地伊屋之免古墳」『久地伊屋之免遺跡』高津図書館友の会郷土史研究部
村田文夫 2000 「縦位に隆帯が貼付けられた土器」『考古学論究』7 立正大学考古学会
藤崎芳樹 1982 『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』千葉県土木部・㈱千葉県文化財センター
向坂剛二・辰巳 均 1982 『伊場遺跡遺物編3』浜松市教育委員会
茂木雅博・塩谷 修編 1982 『常陸安戸屋古墳』水戸市教育委員会
廣岡 敏ほか 1985 『龍門寺遺跡』いわき市教育委員会・㈱いわき市教育文化事業団
古川博行ほか 1990 「男壇遺跡」『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』会津坂下町教育委員会
山上英誉 1982 『月の輪遺跡群III』富士宮市教育委員会
山田隆一 1998 「大阪府下出土の東海・東国地域の土器」『庄内式土器研究』XVI 庄内式土器研究会